

学年特性

目次

「年齢」の持つ意味を考える…………… 深谷昌志 ……………	2
〔調査レポート〕学年特性	7
要約 ……………	8
はじめに ……………	12
1. 基本的な生活習慣 ……………	13
●起床・食事・就寝 ……………	13
●生活時間（遊び・手伝い・テレビ・勉強） ……………	20
●おこづかい・持ち物 ……………	24
2. 学習場面 ……………	26
●教科の好き嫌い ……………	26
●授業に対する姿勢 ……………	29
●学校について考える ……………	31
●塾 ……………	35
3. 人間関係をめぐって ……………	42
●仲よしの友だちと ……………	42
●担任の先生と ……………	46
●両親と ……………	48
4. 心理的側面の成長と発達 ……………	51
●ゆらぐ未来指向 ……………	51
●うすれる幸福感 ……………	53
●不健康な体調 ……………	54
●失われゆく自信 ……………	55
〔対談〕学年・学級制を考える…………… 下村哲夫 vs 深谷昌志	57
・文献紹介『学年・学級の経営』……………	66
資料1 調査票見本 ……………	69
資料2 学年・性別集計表 ……………	80

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

「年齢」の持つ意味を 考える

静岡大学教授
深谷昌志

生物学的な年齢は同じでも

9歳でも10歳でもよい。生物学的に言えば、昔も今も、9歳は9歳である。そして、9歳の子の多くは小学4年生として学年に配属されていよう。

明治40年に小学校が6年に延長されて以来、子どもたちは小学1年から2年、そして3年と、小学校に6年間在籍する。そして、新入生の小1、あるいは教室が騒がしくまとまりのないのが小3、そして学級の中が固定して深まりの出るのが小5など、学年特性をふまえた学級経営が行われてきた。

学校全体の中でも、ベテランの教師が小1と小6をおさえ、新人の教師が小2か小3を担当するというような形が定着していたように思う。

しかし、子どもをとりまく環境が大きく変わった。したがって、生物学的に9歳であっても、現在の9歳が20年前、あるいは10年前の9歳とは同じでないように思う。

それにもかかわらず、現在の学校では、一

昔前の学年特性と同じとらえ方で、子どもたちを把握しているような気がする。そこで、子どもたちをとりまく状況がどう変化してきたのかを改めて概観してみたい。

「サっちゃん」が世に出た頃

「サっちゃんがね」という童謡がある。なんとなく子どもらしい子どもの姿が描かれていて、今でもよく歌われている。しかし実際に、「サっちゃん」的な子は少なくなったような気がする。

この「サっちゃん」が世に出たのは昭和34年だから、今から35年ほど昔の話になる。この年の4月、皇太子の結婚パレードが行われ、そのテレビを見ようと受信契約台数が200万を超えている。

力道山のプロレス中継をうつす街頭テレビに人々が群がったのが、昭和29年。なにしろテレビ1台が当時の価格で17万円。現代に換算すると、1千万円を超える高嶺の花がテレビであった。しかし、テレビの普及につれて価格も10万円を割るようになり、契約世帯も

昭和33年5月の100万台から、パレードの始まる34年までの1年間に、ほぼ倍増の伸びを示している。

といっても、まだまだ庶民の手の届くテレビではなく、その頃、テレビ・ジブシーという言い方が流行した。ジブシーのようにテレビのある家庭を訪ねて歩く子どものことを指す言い方だが、こうした光景も、昭和30年代後半になると見られなくなる。

テレビの受信台数が1千万台に達し、全世帯の半数の家庭でテレビが見られるようになったのは昭和37年のことで、翌38年には国産初のアニメ「鉄腕アトム」の放映が始まるのに続いて、「鉄人28号」も放送されている。さらに、この年に「おかあさんといっしょ」や「ロンパールーム」などの幼児になじみ深い番組もスタートしている。

したがって、昭和34年から37年のわずか3年の間に、テレビの意味が大きく変わっているのがわかる。つまり、手の届かない遠い存在から居間にある身近な娯楽の対象にテレビが変化している。

ギャング集団が消えた

実をいうと、こうした変化はテレビに限られていない。「サッチャン」が登場した昭和34年に『少年サンデー』や『少年マガジン』といったマンガ週刊誌が発刊されている。マンガ雑誌時代の幕明けである。

それまで、子どもたちは、家のまわりで友だちと鬼ごっこをしたり、かくれんぼをして夕方までの時を過ごすのが常であった。そうした子どもの群れのことをギャング集団と呼ぶ。家の近くの子どもが集まって群れを作り、屋外で体を動かしながら、子どもたちだけで時には悪さを重ねつつ、自分たちの作った遊びに興ずる。そうした子どもたちの所に時間を決めて紙芝居が訪ねてくる。それと同時に駄菓子屋へ行ってあてものをしたりするの子どもたちの生活だった。

子どもたち全員が顔見知りで、いわばパー

ソナルな関係の仲間たち。換言するなら、その地域ごとのマイナーの集団。それが、ギャング集団だった。

蛇足ながら、この「ギャング集団」という用語は、子どもたちの遊ぶさまが、縄張りを作り、親分子分に似た関係がみられ、しばしば悪さをくり返すので、ギャングに感じが近いと1920年にアメリカの社会学者が命名したといわれる。そして、その指摘が世界の研究者の共感を得て、学術的な市民権を得た経過を持つ。

それだけに、かつてはむろんのこと、現在でも、どこの社会に出かけても、子どもたちのギャング集団に出会う。貧しさのために働いていたり、学校へ行けない子どもがいる社会でも、ギャング集団だけは存在している。

しかし、日本ではなぜか、ギャング集団が解体され、現在、そうした群れを見ることができない。そこで、解体したのがいつ頃なのか問題になるが、大づかみにすると、昭和30年代の後半、具体的には昭和37～38年に群れ遊びが失われていった地域が多い。

加太こうじが『紙芝居昭和史』の中で、紙芝居をいよいよ作れなくなり、紙芝居が死を迎えたのは昭和34年の12月だと話している。実際に、子どもの世界から紙芝居や駄菓子屋が姿を消し、それに代わって、子どもたちが大手のメーカーの作るチョコレートやスナックを食べながら、テレビのアニメを見つめる。そうした変化の生じたのが、昭和39年を境とした何年かだったのである。

マルチ・メディアの中で育つ

こう考えてくると、「サッチャン」を聞いていると昔の子どもを思い出すと述べたが、確かに「サッチャン」が、子どもたちが友だちの間で自然に囲まれて自由に遊んでいた時代の最後の時期に作られたのがわかる。子どもたちが子どもらしく暮らしていた時代である。

それでも、昭和30年代後半の子どもたちの

見ていたのは白黒テレビで、しかも、一家に1台しかないから、テレビは一家だんらんのシンボルであった。そういえば、チャンネル権という言葉をおこす。1台のテレビで何を見るかが問題になったからである。

しかし、そのテレビもカラー化するのと前後して、一家に何台ものテレビのあるパーソナル化の時代を迎えた。それに加え、テレビにビデオの機能が加わり、自分のペースで見たいものを見られるようになった。さらに、テレビゲームの登場によって、テレビは子どもにとって魅力的な玩具的な意味を持ち始めた。そして、テレビがパーソナル化すると同時に、多様な機能を持つ傾向はこれから先ますます強まってこよう。すでに衛星放送が開始されているが、そうした形でチャンネルが増えてくれば、子ども専用の教育局や娯楽局も予想されよう。アメリカにはディズニーのチャンネルがあって、ミッキーマウスやドナルドダックを24時間体制で放送している。

もちろん、こうした変化はテレビだけでなく、ラジカセやCD、そしてファックス、さらに、多目的に使える電話と、子どものまわりにはさまざまな魅力的な玩具が加わってくる。

したがって、子どもたちは鬼ごっこやかくれんぼを忘れ、テレビを見たり、マンガを読んだり、テレビゲームをしたりして、毎日を過ごす感じになる。

戸外で何人かの友だちと体を動かしながらでなく、家の中でひとりきりでメディアを相手にじっとしたまま時を過ごす生活である。

しかも、そうした生活が生まれてからずっと続いていくのであるから、マルチ・メディアに囲まれて育つ現代の子どもたちは、かつての子と異質の成長のスタイルをたどり始める。

過教育の渦にまきこまれる

子ども部屋の中で受け身の形で時を過ごす現代の子どもたちも、時にはチャレンジする

こともある。それは勉強をしているときで、昭和50年頃、乱塾時代の言葉が生まれている。

その頃、小学生の間で学習塾通いをする子どもが増え、翌51年、文部省は塾通いについての全国調査に乗り出している。

そして、子どもの頃からの塾通いは子どもを心身ともに損なわせると、塾通いを非難する声も大きかったが、塾通いをする子どもは減少することはなかった。

それから10年後の昭和62年に、文部省は2度目の塾通い調査を実施している。その結果によると、10年の間に、通塾する年齢が低下すると同時に、大都市から小都市、そして山村部へと、通塾現象が広がっている。

城山三郎の小説に『小さな戦士たち』がある。小学生を対象とした大型の学習塾の内情を紹介しながら、受験勉強で歪みの生じた家庭の姿を描いたものだ。今になって読み直してみると、描かれていることがあたり前のように思える。それだけ、われわれが子どもたちの乱塾傾向に慣れてしまったのであろうか。

教育過熱状況は過教育といわれるようにエスカレートするばかりで、子どもたちは、塾へ行かなくとも、家庭で長い時間、予習や復習を重ねている。

子どもたちが勉強をするのはよい。しかし親たちや本人が望むような成績をとりにくい。そうなると、努力が報いられないので、「がんばっても駄目な自分」という気分になりやすい。

なにしろ、子どもたちは成績がよいと一流の高校へ入れ、望みの大学へ進めるだけでなく、大手の企業に勤められ、みんなから尊敬され、やりがいのある仕事につけると思っている。つまり、成績のよさがすべてを可能にする打ち出の小槌のように感じている。それだけに、成績がふるわないと、小槌を持っていない自分を感じて、やる気を失っていく。

したがって、子どもを対象とした調査を行ってみると、成績のよい子は意欲をみせているが、成績が下位になるにつれて無気力な子の割合が増す。そして不幸なことに、成績

のよい子は少数なので、その他の多くの子どもたちは、がんばっても成績のよくなるに自分絶望し、挫折の気持ちを強める。

そして、そうした落ちこんだ子のまわりに、すでにふれたようにマルチ・メディアがあるので、子どもたちはそうした世界に逃避しやすい。

子どもらしさの喪失

こう見てくると、現代の子どもたちは子ども部屋の中に籠もったまま、傷ついた心をメディアを相手に癒している感じになる。

そうした子どもたちが、かつての子どもと比べて異質な育ち方をしているのはすでに述べた通りだが、その特性を列挙してみると、以下ようになる。

① 自然とのふれ合いに欠ける。

なにしろ外へ出て遊んだことがないのだから、寒さや暑さを知らない。季節感を持たない子どもたちである。それに加え、トンボや魚にさわったこともないし、木に登ったこともない子でもある。

② 友だちがいない。

ひとりきりで暮らしているから、友だちとけんかをしたことがない。友にしてあげることも少ないし、してもらったこともない。現代では、『走れメロス』は、フィクションの世界のできごとで、現実感を持ちにくい子どもが多いのではないか。

③ 未来に夢を抱いていない。

勉強の得意な子はともかく、そうでない子どもたちは自分に自信をなくし、やる気を喪失している。それだけに、がんばるタイプの子どもの数が減少している。

④ 体を動かすのが苦手。

遊んだことがないので、家の中でじっとしているのが好きな子どもたち。汗をかくのが苦手なタイプである。鬼ごっこをしているよりテレビを見ている方が楽しいのだから仕方がない。

この他にもいくつかの条件をあげることができるが、こう見てくると、子どもたちが子どもらしさを失っている感じがする。

坪田譲治の『善太と三平』、あるいは、宮沢賢治の『風の又三郎』など、かつての童話に登場してくる子どもたちは、体を動かすのが好きで友だちも多く、やる気に富み、自然の中で暮らしているタイプだった。「サッチャー」も、そうした子のひとりであろう。

童謡の場合、童話以上に、季節感や友との心の通い合い、未来への夢、そして遊びなどが題材にされる。しかし、そうした感覚が失われたのが現代の子どもである。

マルチ・メディアに囲まれた子どもの生活をコミカルなタッチで描けば、それなりの歌ができるかもしれない。しかし、情緒のあふれる子どもの歌らしい作品をそれほど多く望めないように思う。

そう考えてくると、童謡の名作が生まれなないのが現代なのであろう。童謡が育つ土壌が失われているのだから仕方がない。しかし、それは換言すると、子どもたちの生活がそれだけ子どもらしさをなくし、危機に瀕していることになる。

子どもを見ているだけですばらしい詩や歌が浮かんでくるような生活を子どもたちが取り戻すのは不可能なのであろうか。子どもの人間形成にとって遊びの意味を理解し、屋外での友だちとの遊びを奨励する。そうすれば、現代の子どもたちもテレビを離れて、群れ遊びを始める。その結果、子どもらしさも戻ってくるように思う。

そうした感慨はともあれ、冒頭のテーマに戻るなら、同じ9歳でも、かつてと比べ、知っている知識は広がっていても、人間関係が狭く、体力面でも低下し、精神的にも自立が遅れているように思う。学年を考えるにあたって、そうした子どもたちの成熟度を視野に入れてとらえ直す必要があるように思われてならない。

〔調査レポート〕

学年特性

静岡大学教授	深谷昌志
杉並区立杉並第六小学校教諭	土橋稔
埼玉県立小川高等学校教諭	三枝恵子
目黒区立不動小学校教諭	矢部崇
横浜市立上郷南小学校教諭	戸塚智
杉並区立桃井第二小学校教諭	鶴巻景子
千代田区立麹町小学校教諭	島田美佐江



調査レポート

学年特性

要約

●調査概要

1. 調査主題 学年特性
2. 調査視点 近年、子どもが変わったといわれる。これまでの発達段階の理論にははまりきれないような子どもたちの姿に、とまどいを覚えることも多い。そこで、現代の子どもたちの発達を特徴づけるものを明らかにすることを目的に行ったのが本調査である。
3. 調査項目 基本的な生活習慣、人間関係、学習・学校生活、職業、自己像、など。
4. 調査時期 1993年12月～1994年1月
5. 調査対象 東京・千葉・岐阜の公立小学校4・5・6年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査
7. サンプル数

(人)

	4年	5年	6年	計
男子	344	350	379	1,073
女子	299	362	330	991
計	643	712	709	2,064

1. 起床時刻は「7時頃まで」に起きる子どもが約7割から8割、「自分の力や目覚まし時計」で起きる子が約半数、学年差はほとんどみられない。

(表1、表2)

2. 就寝時刻は、「10時頃まで」が4年生で約7割、5年生で約5割、6年生では約4割と減少する。特に、6年生になると、「11時以降」に寝る子が23%もあり、夜型志向の傾向が強くなる。(表6)

3. 放課後の遊びについては、男子は1時間から2時間半くらい遊んでおり学年差はみられない。女子は学年が進むにつれ遊ぶ時間が短くなり、外遊びより室内遊びが増えてくる。(図4、表7)

4. テレビの視聴時間は、学年が上がるにしたがって増える。(図5)

勉強時間は6年生になると、一生懸命勉強する群、ほどほどに勉強する群、まったくしない群とに分化してくる。(図6)



5. 教科の好き嫌いでは、どの学年でも「体育」が好きな割合が最も高いが、学年が上がるにつれ、「とても好き」の数値が減少してくる。(図9)

6. 通塾率は、4年生で44%、5年生で49%、そして6年生では58%と増加し、性差はほとんどみられない。塾での勉強時間は、4年生と比較すると、5・6年生では「3時間以上」と答えている割合が約3倍にもなる。(図15、表17)

塾に通う理由では「もっと実力をつけるため」がどの学年も約5割、続いて「受験のため」「成績を上げるため」である。しかし、6年生になると「ただなんとなく」「友だちが行っているから」「親に行かされている」などの消極的理由の数値が上昇する。このようなネガティブな理由が「塾に行く楽しさ」を減少させている。(図16、表18)



学年特性

要約

7. 学校の楽しさは、4年生で「とても楽しい」割合は47%、5年生で39%、6年生では36%と次第に減少する。性差でも同様である。(図11、表11)



8. 友だち関係では、4・5年生の男子の約7割が「10人以上」の仲よしの友だちがいる。6年生になると少人数のグループを作り、親密さを増す傾向になる。(表22)



9. 担任の先生と積極的にふれあいをしているのは4年生。6年生になると困ったことや悩みを相談するのは約1割、逆に、口答えしたり、かげで先生の悪口を言ったりする割合が増える。6年生になると身体的、精神的に大きく変化し、おとなや教師を冷静にみつめ、批判的になったり、干渉されることを拒否する思春期の特性があらわれている。

(図21、表23)

10. 「もう一度生まれ変わるとすれば、男女どちらがいいか」をたずねると、「ぜったい・できれば男」の割合は学年が上がるにしたがい増加するが、「ぜったい・できれば女」の割合は減少する。特に女子では、また女に生まれたい割合は学年が上がるにしたがい減少し、「ぜったい女がいい」と思っている子は4年生41%、5年生35%、6年生では26%となり、女子の男性指向が強まる傾向にある。(表29)



11. 「とても・わりと幸せ」の割合は、学年が上がるにしたがい減少する。男女差ではどの学年でも女子は「幸せ感」が高く、男子は「あまり・ぜんぜん幸せでない」割合が高い。(表31)

自分が「とても・わりと好き」の割合は学年が上がるにつれ減少し、逆に「好きでない」割合は4年生14%、5年生26%、6年生29%と学年が上がるにつれ増加し、男子は自己に肯定的で、女子は悲観的である。(表32)

12. 万能感や自己肯定感を持って生活しているのは4年生が最も高く、5・6年生になると減少してくる。高学年になると自己を客観的に冷静に把握してくることから、多少自信を喪失していくのもやむを得ないが、もう少し自己を高く評価して、自信を持って生きていってほしい。(表34)

●

はじめに

子どもが変わった。

『小学生ナウ』でも、そんな問題意識を持ちながら現代の子どもたちの意識や行動について、さまざまな角度からレポートしてきた。

毎日夜遅くまで塾通いしている小学生。休みの日も家の中に閉じ込め、ほとんど友だちと遊ばない子。そして、おとなも驚くような知識を持っている一方で、生活力の欠如や人間関係のもろさを見せたりする。

そんな中で、これまでの発達段階の理論にはまりきれないような姿を子どもたちはいろいろな場面でみせている。例えば、小学校高学年の女子の早熟さと、男子の幼さなどは目立つ傾向である。

そこで、現代の子どもたちの発達を特徴づけるものを探そうとして行われたのが本調査である。

調査は、基本的な生活習慣、人間関係、学習場面、そして職業、自己像などについて、学年別、性別に分けて、その発達を捉えようとした。

1

基本的生活習慣



4年生、5年生、6年生の子どもたちは、どのような日常生活を送っているのだろうか。まず、その生活スタイルから、それぞれの学年特性をみていくことにする。

●起床・食事・就寝))

4年生の平均的な朝の様子をスケッチしてみる。表1によれば8割の子が、7時頃までに起きる。「自分で起きる」子は、男子で38%、女子で24%、「目覚まし時計で起きる」子を含めると半数以上の子が、起こされなくても起きることができる(表2)。次に、ほぼ9割の子が朝食を食べ(図1)、男子は48%、女子は68%の子が歯をみがき、学校へと出かける(図2)。

では、5年生、6年生はどうだろうか。起床時刻は、5年生も、6年生も7時頃までに7~8割の子どもが起きている。「自分の力」や「目覚まし時計で起きる」子が半数、「母親や家族に起こしてもらおう」子が半数と、

ほぼ4年生と同じような起床である。しかし、「朝食を毎日食べる」子の割合は、男女とも6年生になるにつれ、減ってきている。それに対して、「歯を毎日みがく」子の割合は、男女とも6年生になるにつれて増え、思春期に入ってきた子どもたちが、スタイルや身だしなみを気にするようになり、生活スタイルを少しずつ変化させはじめたことがうかがえる。また「家族と一緒に朝食をとる」より、「自分1人で朝食をとる」子が、6年生の男子ではほぼ4人に1人で、自分たちの思い思いに朝食をとり学校へと出かけていく様子が見えてくる(表3)。

表1 起床時刻

(%)

	4年	5年	6年
6時前	4.4	3.6	5.0
6時頃	8.7	8.8	8.2
6時半頃	29.3	24.5	28.1
7時頃	41.6	41.6	39.6
7時半頃	14.4	18.6	16.9
8時以降	1.6	2.9	2.2

表2 朝の起き方

(%)

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
自分1人の力で	38.2	23.6	35.1	22.9	34.4	22.2
目覚まし時計で	18.0	26.4	19.4	31.9	26.0	33.5
お母さんに起こしてもらおう	37.5	43.8	31.9	40.1	27.3	37.9
家族に起こしてもらおう	3.9	4.5	10.1	3.7	8.8	5.5
その他	2.4	1.7	3.5	1.4	3.5	0.9

図1 朝食を食べるか

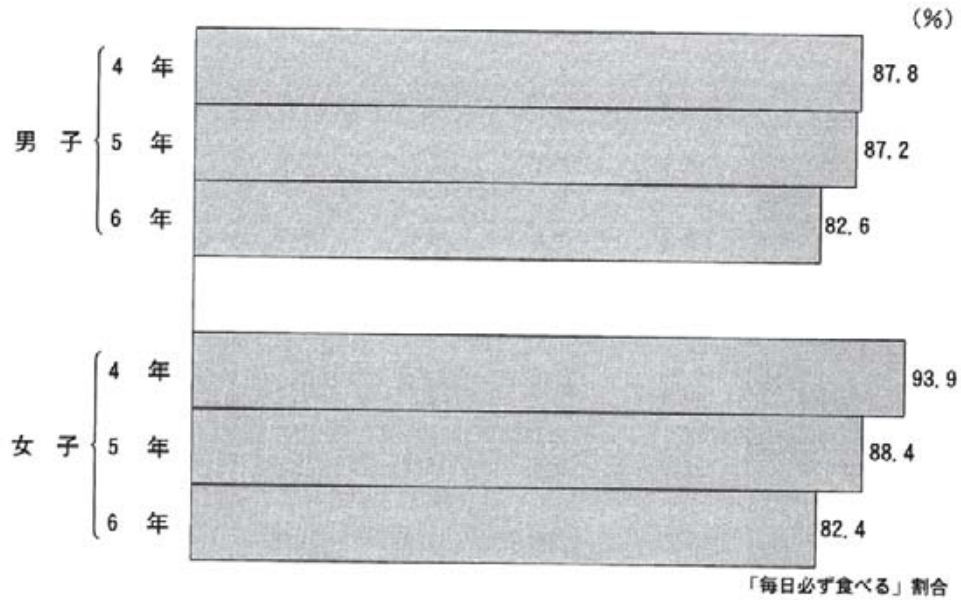


図2 朝、歯をみがいて学校に行く

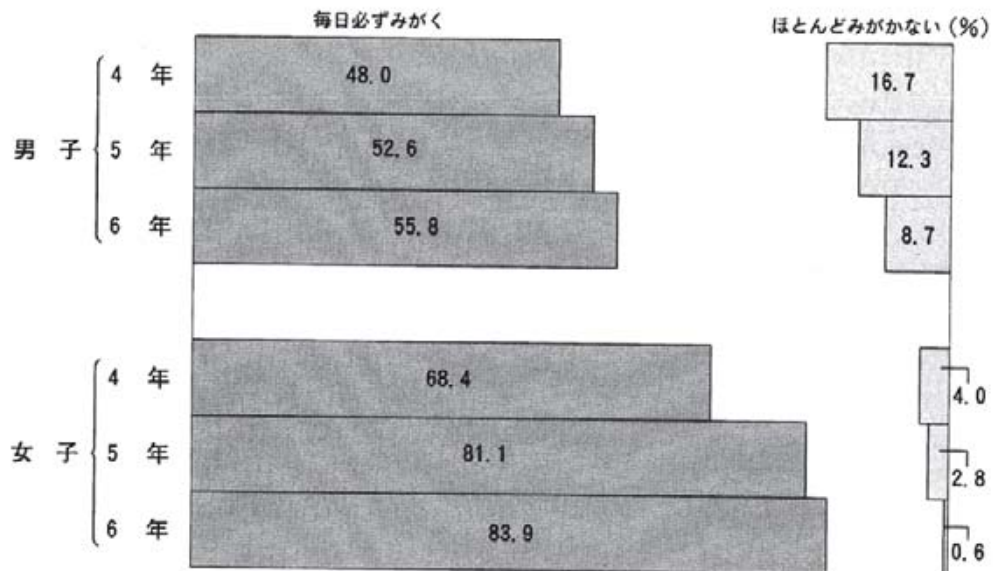


表3 朝食は誰と食べるか

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
自分1人だけで	13.9	11.2	17.6	13.6	23.7	20.8
お母さんと2人で	6.8	7.8	6.6	5.0	2.9	11.9
お父さんと2人で	2.1	1.4	1.7	1.9	2.4	1.2
兄弟と一緒に	29.4	30.9	28.5	32.3	26.1	31.6
家族全員で	22.0	20.4	18.5	21.4	19.9	15.0
お父さん以外の家族全員で	16.9	21.8	17.9	16.1	15.4	13.1
その他	8.9	6.5	9.2	9.7	9.6	6.4

では、夕食や就寝時刻ではどうだろうか。表4、表5をみると、夕食を食べる時刻は、どの学年も6時半から7時半にかけてが多く、家族全員または、父親を除く家族と一緒に、ほぼ7割から8割の子が夕食をとっていて、

特に学年による大きな差はみられない。企業戦士として働くことを余儀なくされている父親も多いが、家族での夕食のひとときを大切にしている母親の姿が子どもたちの生活をリードしているようである。

表4 夕食を食べる時刻

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
6 時前	4.5	1.7	3.6	2.5	2.4	2.2
6 時頃	13.1	15.2	9.2	8.9	10.7	9.6
6 時半頃	26.8	22.8	27.2	22.6	23.0	22.6
7 時頃	29.0	35.8	33.0	34.6	33.8	34.3
7 時半頃	16.7	16.6	15.1	19.3	16.8	18.0
8 時頃	4.8	5.5	6.5	7.0	5.6	6.5
8 時半頃	2.7	1.4	3.0	3.4	3.5	4.0
9 時頃	1.5	0.3	1.5	0.6	2.1	1.9
9 時すぎ	0.9	0.7	0.9	1.1	2.1	0.9

表5 夕食は誰と食べるか

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
自分1人だけで	1.8	1.0	2.6	1.1	5.1	3.7
お母さんと2人で	4.5	4.1	4.9	4.2	5.9	6.1
お父さんと2人で	0.3	0.3	0.6	0.6	0.0	0.6
兄弟と一緒に	6.3	4.5	8.1	4.5	7.0	5.5
家族全員で	37.4	38.4	36.9	32.8	37.4	35.6
お父さん以外の家族全員で	41.6	45.2	37.4	48.4	37.6	38.4
その他	8.1	6.5	9.5	8.4	7.0	10.1

それに対し、就寝時刻は、学年により、大きな差がみられ、4年生のほぼ7割が10時頃までに就寝するのに対し、5年生では10時半以降に就寝する子が約5割、6年生になると

4割の子が11時頃またはそれ以降の就寝となり、夜ふかし型になる(表6)。表1で起床時刻は、学年による大きな差はなかったことから、就寝時刻が遅くなる6年生は、当然夜

表6 就寝時刻

(%)

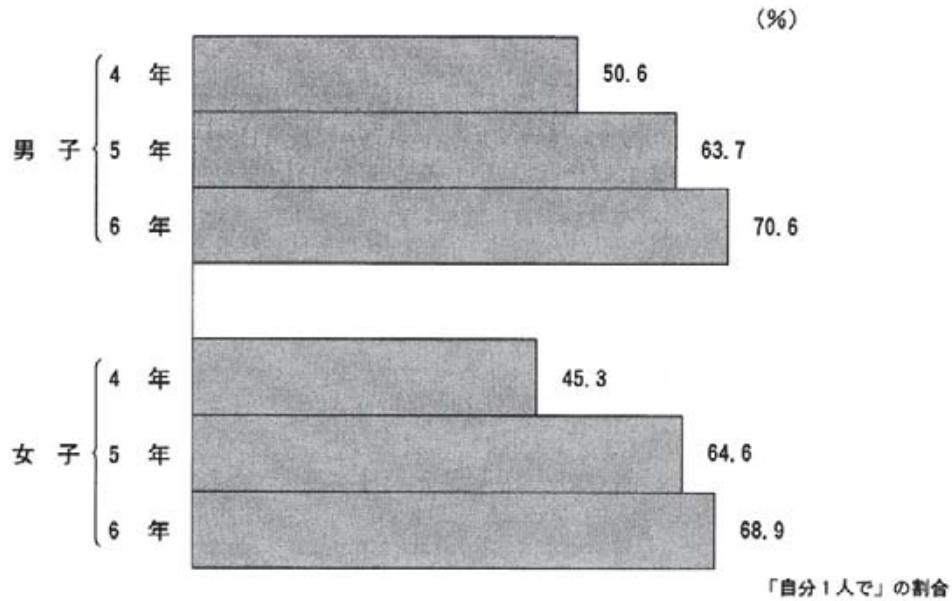
	4年	5年	6年
9時前	6.7	4.0	1.8
9時頃	18.7	9.7	5.8
9時半頃	22.1	17.4	10.9
10時頃	22.0	22.7	19.9
10時半頃	15.4	17.3	22.4
11時頃	8.1	12.0	16.3
11時以降	7.0	16.9	22.9

ふかしからくる睡眠不足となり、成長期の子
どもたちの体に与える影響が気にかかる。

また、「誰と一緒に寝るか」という質問に
対し、図3のように、学年が進むにつれ、1

人で寝る割合がぐんと増えている。自分なり
の生活空間と生活リズムを持つようになって
きている。

図3 誰と寝るか



●生活時間（遊び・手伝い・テレビ・勉強）

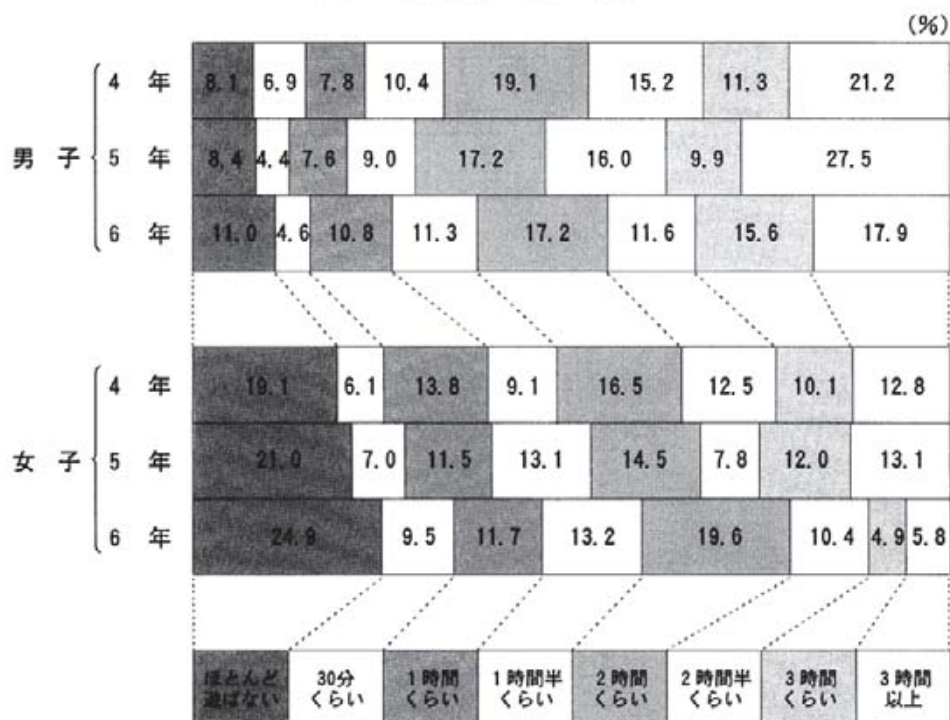
それでは、学校から帰宅し就寝するまでの自由な時間、子どもたちはどのように過ごしているのだろうか。

まず、帰宅後の遊び時間についてみる。図4によれば、どの学年も男女とも「1時間～2時間半くらい」遊んでいる子が約半数で、男子は、どの学年も「3時間またはそれ以上」遊ぶ子が3割を超えている。それに対し、女子は、学年が進むにつれ、遊ばない子の割合がぐんと増え、6年生では「ほとんど遊ば

ない」と「30分くらい」を合わせると34%にもなる。また外での遊びよりも室内での遊びがぐんと増えてくる（表7）。学年が進むにつれ、遊ばなくなり、遊んだとしても室内という女子の姿が浮かび上がってくる。

お手伝いについては、どうだろうか。表8をみると、男子は、「5～10分くらい」お手伝いをする子が多く、女子は、「20～30分くらい」お手伝いをする子が多い。学年が進むことでお手伝いの時間についての大きな変化

図4 帰宅後の遊び時間



はみられない。家事の合理化で子どもたちのお手伝いが減っているといわれる中、1割近い女子が毎日お手伝いを「1時間以上」して

いるというのは驚きである。家族が協力し、家事を行うという共働き家庭の生活スタイルが、子どもたちの生活スタイルにも影響を

表7 外遊びと室内遊び

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
だんぜん外遊びが多い	31.3	14.0	22.5	13.1	24.1	6.1
どちらかといえば外遊びが多い	17.3	19.1	13.9	11.2	15.3	11.6
同じくらい	32.4	43.8	37.3	41.6	34.6	31.5
どちらかといえば室内遊びが多い	14.3	17.7	17.9	27.7	16.6	36.1
だんぜん室内遊びが多い	4.7	5.4	8.4	6.4	9.4	14.7

表8 家でのお手伝い

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
まったくしない	13.8	5.1	17.0	5.6	15.8	8.0
5分くらい	23.2	10.8	23.6	7.2	22.2	9.2
10分くらい	21.5	17.9	23.3	19.5	21.7	18.5
20分くらい	19.1	23.0	13.3	16.7	15.2	25.6
30分くらい	15.6	25.0	11.5	27.3	15.2	21.5
40分くらい	2.1	5.1	2.0	8.1	4.3	4.9
50分くらい	0.9	4.7	3.5	4.2	1.3	4.0
1時間以上	3.8	8.4	5.8	11.4	4.3	8.3

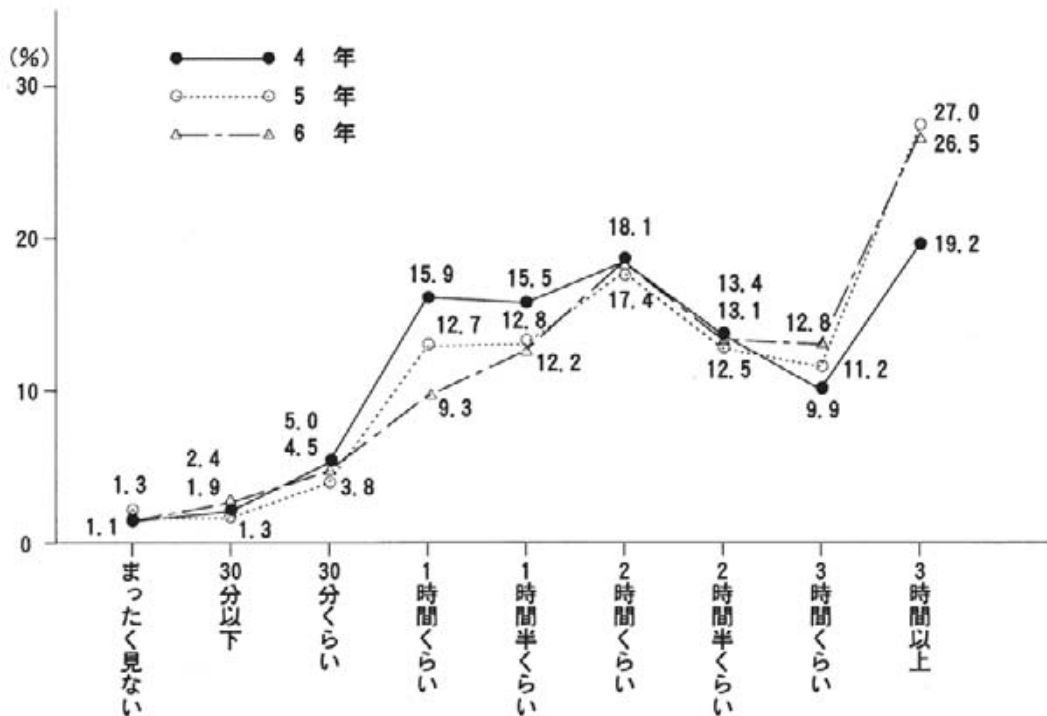
たえているのではないだろうか。

それでは、テレビ視聴時間や家での学習時間についてはどうだろう。図5は学年別のテレビの視聴状況である。毎日テレビを「3時間以上」見ている子が、5・6年生になると増え、約3割もいる。友だちとも遊ばず室内

で過ごすという子は、テレビを友だちとしている面があるのではないだろうか。

図6は、家庭での勉強時間を示したものである。テレビの視聴時間に比べると、どの学年もグラフの山が左よりにあり、勉強時間が少ないことがわかる。「3時間以上」勉強す

図5 テレビの視聴時間

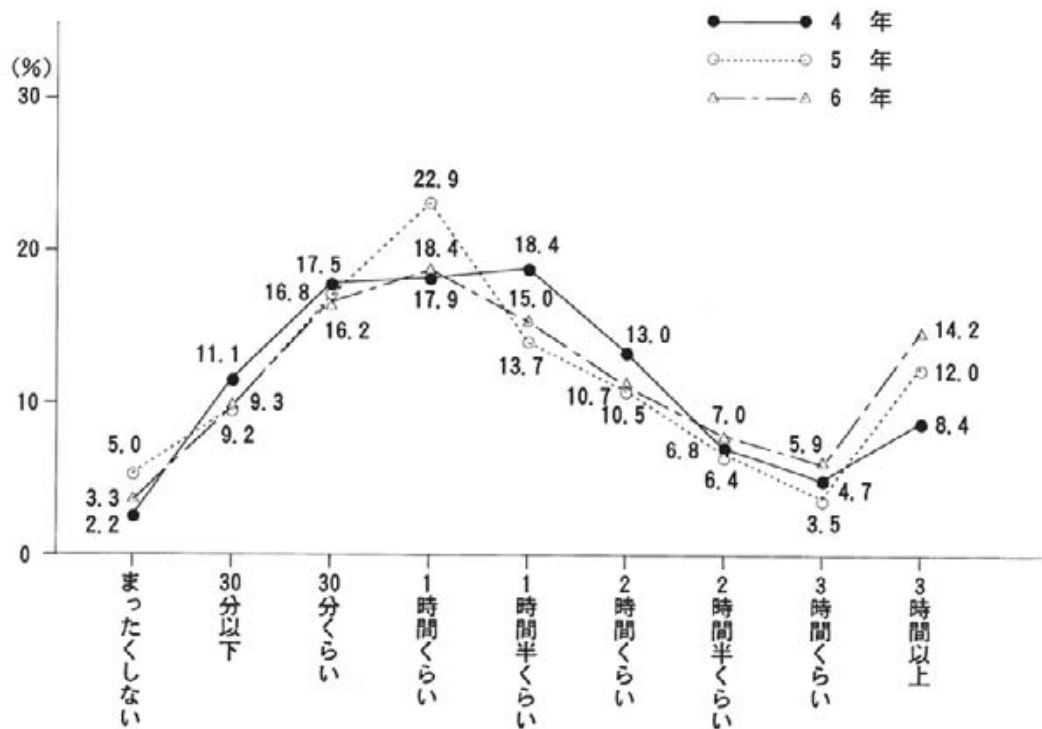


る猛烈勉強型は、6年生になるほど増えている一方、「まったくしない」あきらめ型も、4年生より5・6年生の方が増えている。学年が進むにつれ平均的学習時間は増えているが、図をよく見ると、猛烈に勉強する層、ほ

どほどに勉強する層、まったくしない層とに分離していく傾向がうかがえる。

生活時間の使い方は、学年が進むにつれ、さまざまな型に分化し、遊び中心、テレビ中心、勉強中心などに分かれていくようである。

図6 家での勉強時間（塾も含む）



●おこづかい・持ち物)))

物があふれている現在、子どもたちは、たくさんのおこづかいや高価な物をあたりまえのように手にする。それでは、子どもたちはどのくらいおこづかいをもらっているのだろうか。

図7は、1か月のおこづかいをフリーアンサーで記入してもらいまとめたものである。4年生の平均が922円、5年生の平均が1,172円、6年生の平均が1,364円である。学年が進むにつれ、おこづかいの額が増えることはうなずけるが、2割の6年生が毎月2,000円以上もらっていることは驚きである。

では、自分専用の物については、どうだろうか。図8によると、自転車や腕時計は、どの学年でもほとんどの子が持っている。勉強部屋やラジカセは、学年が進むにつれ、自分

専用が増え、親の勉強への配慮がうかがわれる。ファミコンは、6年生男子よりむしろ5年生男子が多く持ち、ローラースケートなども6年生女子より5年生女子が多く自分専用を持っており、遊び道具は6年生よりもむしろ、5年生の方が豊かに所有している姿がうかがえる。

多くのおこづかいと、自分だけの勉強部屋でラジカセを聞いたりテレビを見たりする6年生、ファミコンやスケートなど遊び道具に囲まれている5年生、自転車や腕時計とまだ少ないが自分専用の物を持ちつつある4年生の姿がうかんでくる。どの学年にも5%程度ではあるが、自分専用のポケベルを持ち、コミュニケーションしている児童がいることは驚きである。

図7 おこづかい

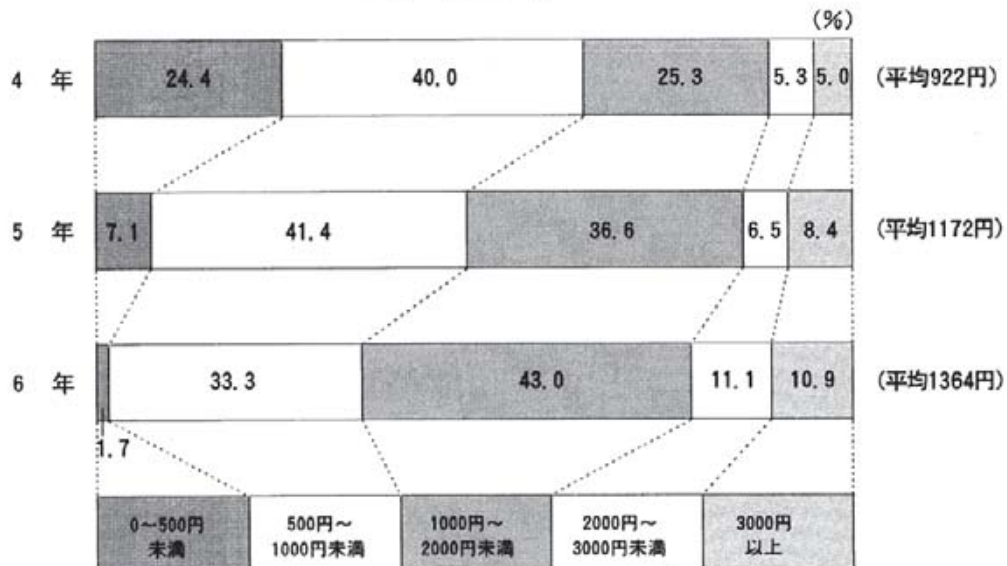
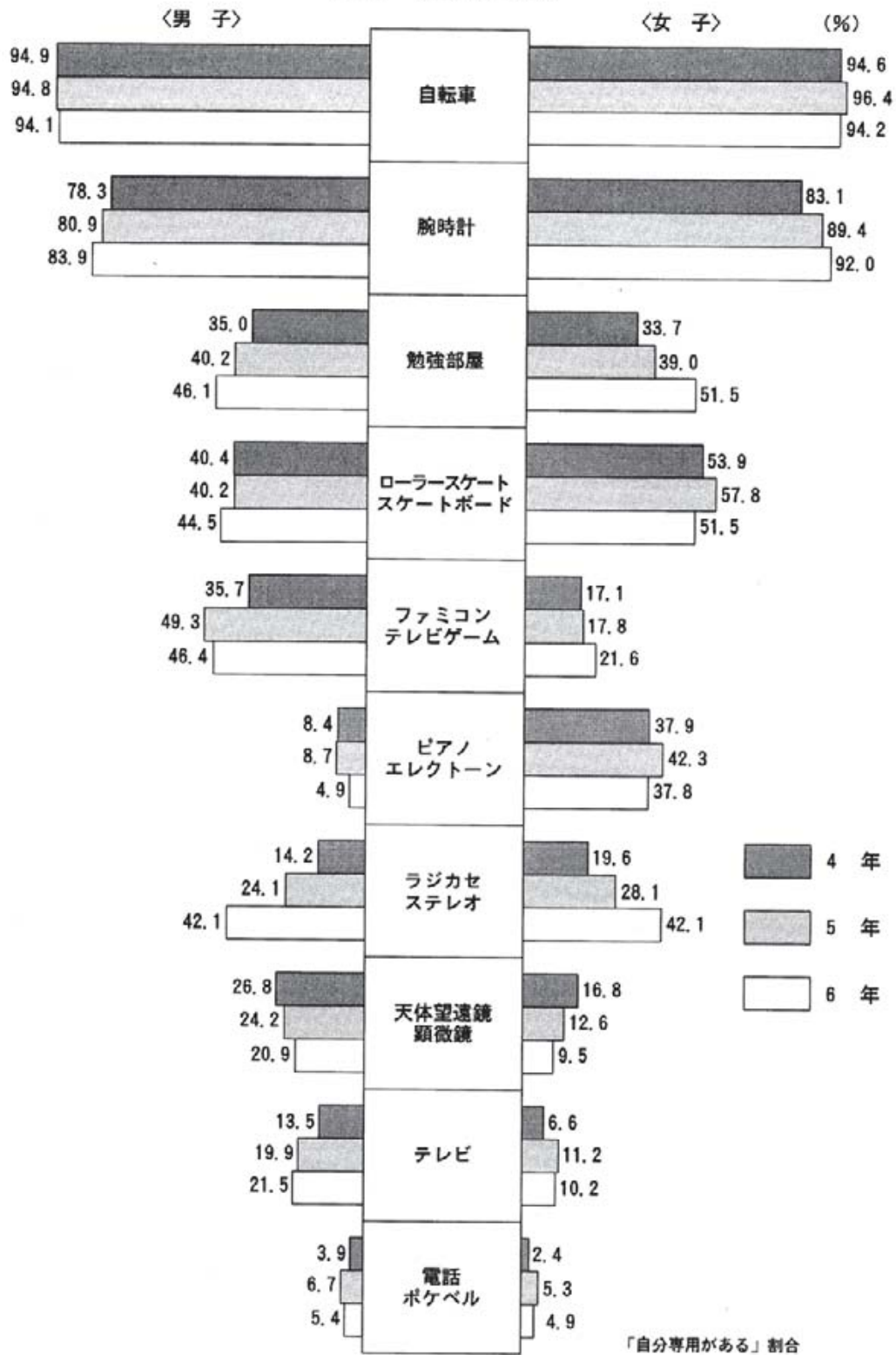
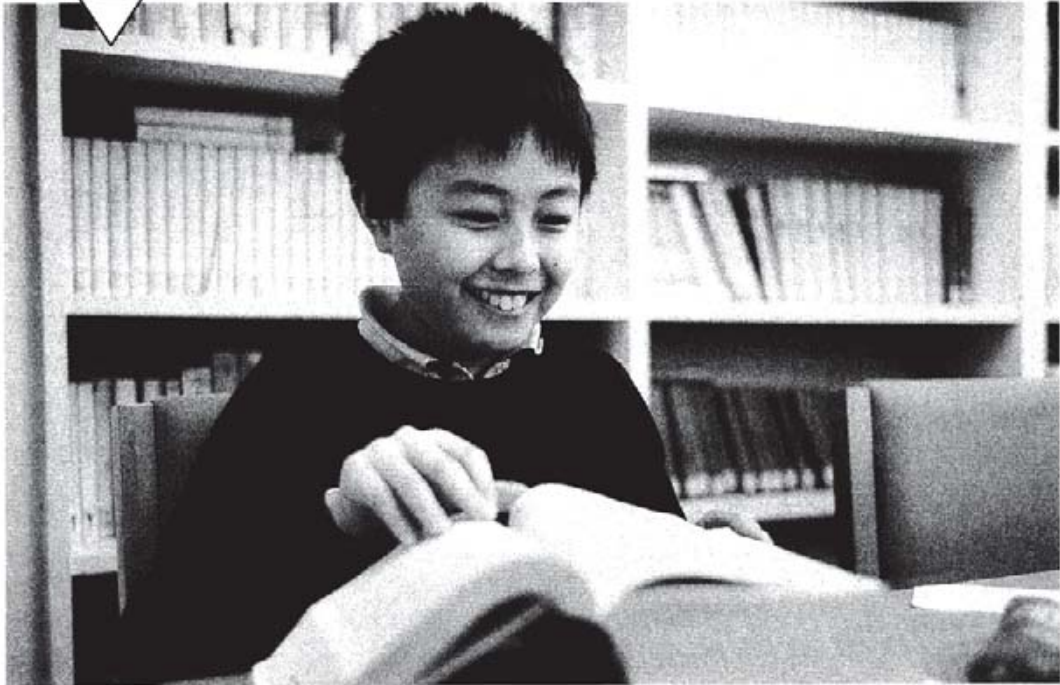


図8 自分専用の物





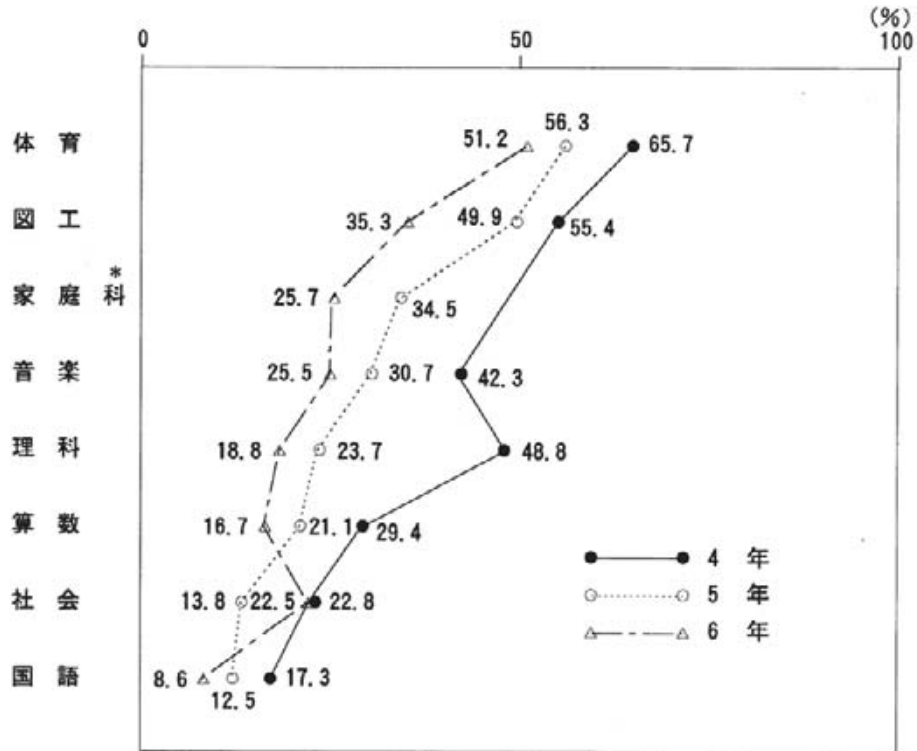
●教科の好き嫌い)))

この章では、子どもたちの学習場面について調査した結果をまとめた。主に、学校での学習と塾についての学習である。放課後の家庭での学習の状況は、すでに1章で触れたとおりである。

まず、子どもたちが学校の勉強の中で好きな教科は何なのかをたずねてみた。それが図9である。各学年とも1位は体育で、「とて

も好き」と答えた子が、4年生で66%、5年生で56%、6年生では51%となっている。学年が上がるにつれて「とても好き」の割合が減少している。以下、各学年とも2位が図工、また、国語は各学年で敬遠されているようである。

図9 好きな教科



「とても好き」の割合
* 家庭科は5・6年生のみ回答

これを男女別に整理したものが表9となる。○が最大値、下線が最小値である。体育は圧倒的に男子から支持されている。特に4年生の男子では実に76%と、4人のうち3人までが「とても好き」と答えている。女子の結果に目を向けると、男子に比べると「とても好き」がやや分散している。4年生の女子では、音楽・体育・図工がいずれも50%台。5

年生の女子では、図工・音楽・家庭科・体育がそれぞれ45%前後。6年生の女子では、音楽と家庭科が両者40%である。しかしながら、学年が上がるにしたがって「とても好き」が減っていくことは、日本の歴史を学習する6年生の社会を除いては、いずれの教科にもあてはまる現象である。

表9 好きな教科

(%)

	(全体)	4 年		5 年		6 年	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子
体 育	(57.4)	76.3	53.5	69.4	43.6	65.1	35.3
図 工	(46.6)	57.7	52.7	51.9	48.1	40.8	29.3
* 家庭科	(31.0)	—	—	22.8	45.8	12.8	40.5
音 楽	(32.5)	29.9	57.4	13.2	47.5	12.2	40.7
理 科	(29.8)	57.3	39.1	28.9	18.6	26.5	10.0
算 数	(22.2)	37.7	19.7	28.0	14.4	17.2	16.2
社 会	(19.6)	26.5	18.5	15.8	11.9	28.9	15.2
国 語	(12.7)	14.0	21.1	7.7	17.2	6.3	11.2

「とても好き」の割合

○は最大値

—は最小値

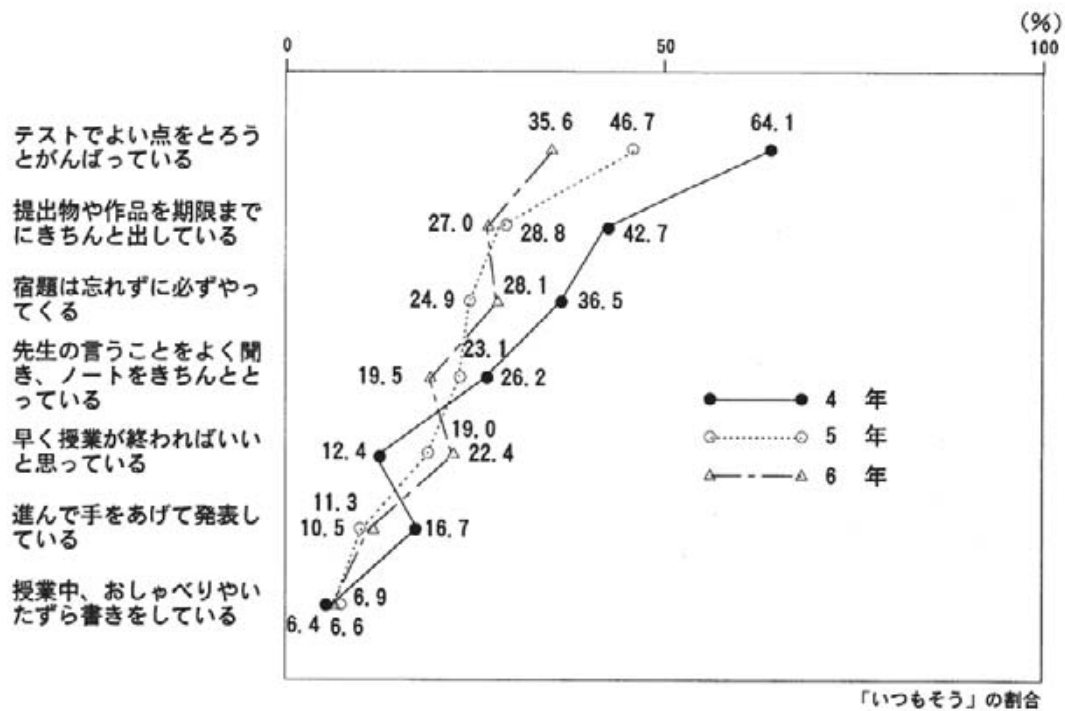
* 家庭科は5・6年生のみ回答

●授業に対する姿勢)))

子どもたちは、学校での授業中にどんなことを考えながら学習に臨んでいるのだろうか。図10には、学習中の態度を答えてもらった結果をまとめている。これによると、各学年とも学習中は「テストでよい点をとろうとがんばっている」子どもの割合が高い。それぞれの学年で1位であるが、4年生では64%、5年生は47%、6年生は36%と、学年が上がる

につれて減少している。同じように、学年が上がるにつれてその割合が減少する項目は、「提出物や作品を期限までにきちんと出している」「先生の言うことをよく聞き、ノートをきちんととっている」などである。逆に、「早く授業が終わればいいと思っている」子どもは学年を追ってその割合が上昇しており、6年生では4年生の約2倍に膨れあがってい

図10 学習中の態度



る。

次の表10は、図10の男女別データである。
6年生の男子では「テストでよい点をとろうとがんばっている」の割合に「早く授業が終

わればよいと思っている」が肉薄している。
いずれこの先、中学生になって、この割合が逆転するであろうことが予想される。

表10 学習中の態度

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
テストでよい点をとろうとがんばっている	64.3	63.9	47.1	46.3	36.3	34.9
提出物や作品を期限までにきちんと出している	36.0	50.3	25.1	32.3	19.9	35.0
宿題は忘れずに必ずやってくる	30.8	43.1	17.4	32.1	20.5	36.8
先生の言うことをよく聞き、ノートをきちんととっている	17.9	35.7	14.7	31.3	12.3	27.7
早く授業が終わればよいと思っている	17.8	6.4	25.4	12.8	30.0	13.7
進んで手をあげて発表している	19.8	13.1	16.0	5.3	17.0	4.9
授業中、おしゃべりやいたずら書きをしている	8.8	3.7	9.5	4.4	9.9	2.8

「いつもそう」の割合
○ は最大値

●学校について考える)))

子どもたちに「学校のことについてどう考えているか」をたずねたものが、次の図11～14である。図11はズバリ「学校が楽しいか」どうかを聞いた結果であるが、4・5・6年生いずれの学年も「とても・わりと楽しい」と考えている子どもがほぼ8割に達している。

しかし、楽しいという程度に学年間での差をみることができる。「とても楽しい」と答えた割合に注目すると、4年生では47%、5年生では39%、そして6年生では36%と、次第に減ってきていることがわかる。表11の男女別のデータにも同様の結果がみられる。

図11 学校が楽しい

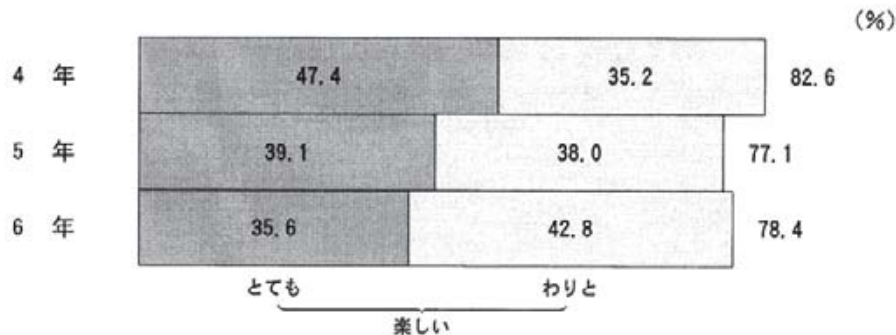


表11 学校が楽しい

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
とても楽しい	45.0	50.3	34.9	43.3	31.1	40.7
わりと楽しい	36.7	33.4	40.3	35.8	43.9	41.6
少し楽しい	13.7	13.0	15.1	15.6	17.3	12.2
あまり楽しくない	2.3	2.3	5.7	4.7	4.0	4.6
ぜんぜん楽しくない	2.3	1.0	4.0	0.6	3.7	0.9

図12、表12では「テストの点や成績が気になる」かどうかをたずねている。先の図10で、「授業中はテストでよい点をとろうとがんばっている」態度で臨んでいるので、それに合わせるように「気になる」と答えた子どもの割合は高く、各学年とも60%近くになって

いる。

図13は、子どもたちの今のクラスに対する評価である。「今のクラスになってよかったか」という質問に対して、4年生では「とてもよかった」と思っている子どもが61%に達している。しかし、5年生になると35%とか

図12 テストの点や成績が気になる

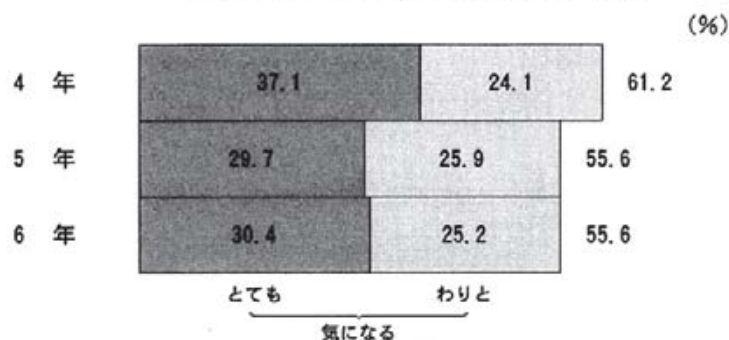


表12 テストの点や成績が気になる

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
とても気になる	40.7	33.1	29.5	29.9	28.4	32.7
わりと気になる	22.9	25.4	23.2	28.5	23.5	27.1
少し気になる	16.7	25.4	22.1	21.5	19.0	22.5
あまり気にならない	9.1	10.4	11.2	13.7	12.8	13.4
ぜんぜん気にならない	10.6	5.7	14.0	6.4	16.3	4.3

なりの落ち込みがみられる。普通は5年生で新しくクラスの編成替えが行われるので「前の4年生の時がよかったなあ」と感じている子どもも多いことであろう。6年生になると割合が42%とやや盛り返しているところを見ると、編成替えがあるということは子どもた

ちにはとても不安なことなのであろうし、1年くらい経ってクラスのよさを本当に感じることができるようになるのかもしれない。

表13には、同じ項目の男女別の結果を載せているが、4年生はともかくとして、5・6年生の女子についてはかなりの差を見いだす

図13 今のクラスになってよかった

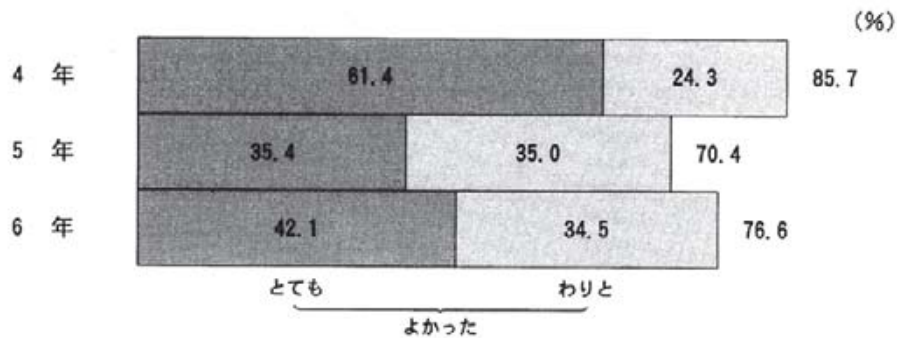


表13 今のクラスになってよかった

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
とてもよかった	63.0	59.6	37.2	33.7	39.9	44.6
わりとよかった	23.7	24.9	34.6	35.4	34.8	34.1
少しよかった	6.5	10.8	13.7	15.9	13.8	11.9
あまりよくなかった	4.4	3.0	7.4	9.7	8.0	7.0
ぜんぜんよくなかった	2.4	1.7	7.1	5.3	3.5	2.4

ことができる。

もうひとつ「今の担任の先生になってよかったか」を聞いてみると、4年生では86%の子どもが「とても・わりとよかった」と答え、学年が上がるにつれて、5年生では71%、

6年生に至っては、66%となっている（図14、表14）。6年生については、5年生と比較すると「今のクラス」については上回っているが、「今の担任」については、下回っているという結果になっている。

図14 今の担任の先生になってよかった

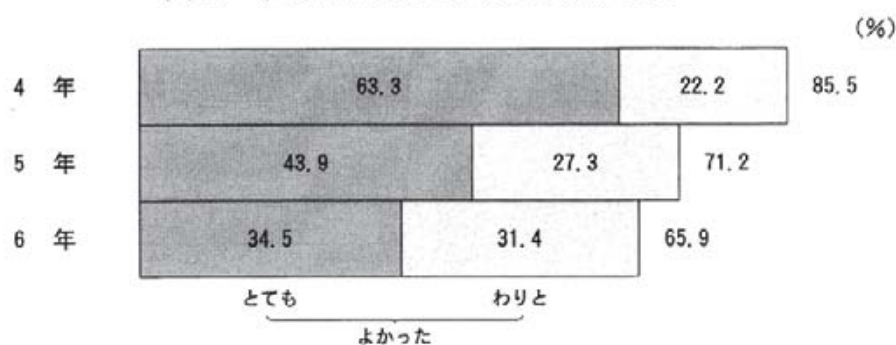


表14 今の担任の先生になってよかった

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
とてもよかった	55.4	72.3	39.0	48.7	28.5	41.4
わりとよかった	23.8	20.4	25.8	28.9	33.7	28.7
少しよかった	10.9	3.3	20.6	14.6	18.1	15.9
あまりよくなかった	3.2	1.0	6.0	5.6	10.1	9.1
ぜんぜんよくなかった	6.7	3.0	8.6	2.2	9.6	4.9

●塾)))

今の子どもたちの放課後の生活の中で、塾やけいこごとの存在は無視できない。ここからは、塾を中心に学年の特性をみていこうと思う。

まず、通塾の状況であるが、図15に示した

とおり、4年生では44%、5年生では49%、そして6年生では58%の子どもが塾に通っていると答えている。

表15には男女別のデータを掲載したが、塾に通っているかどうかに関しては男女差はあ

図15 塾に行っているか

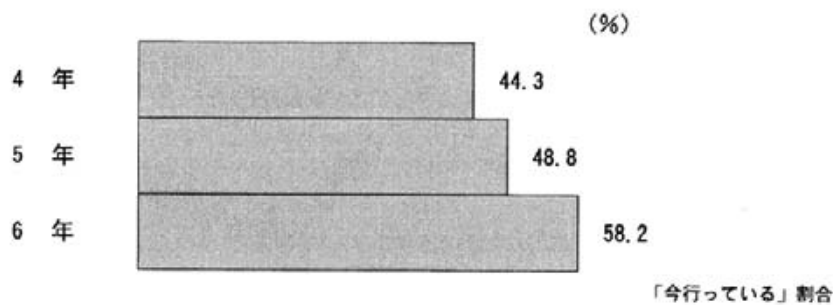


表15 塾に行っているか

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
今行っている	46.9	41.3	48.2	49.4	59.4	56.9
前は行っていたが今は行っていない	6.2	8.1	7.7	6.7	6.4	6.3
行っていない	46.9	50.6	44.1	43.9	34.2	36.8

まりない。しかし、次の表16によると、1週間に通っている日数には、多少だが男女差がみられ、各学年とも女子の方が塾通いの日数が多い。6年生女子は週あたり3.06日の塾通いである。

さらに、表17では塾での勉強時間をたずねている。どの学年も「1～2時間」の間に集中しているが、4年生と比較すると5・6年生では「3時間以上」と答えている子が3倍以上に膨れあがっていることがわかる。つまり、学年が上がるにつれて塾の時間が多くなってきているのである。この原因はどこにあるのだろうか。子どもたちに塾に通って

る理由をたずねてみることにする。

図16は、なぜ塾に通っているのかという質問に対する回答である。理由の第1位は「もっと実力をつけるため」で、全体の50%近くの子どもがこのように答えている。第2位は「中学受験のため」で全体の3分の1程度、続いて「学校の成績を上げるため」が第3位となっている。しかし、こうした目的がはっきりして塾に通っている子もいるかと思うと、「ただなんとなく」通っている子や、「親に無理に行かされている」と感じている子も少なくない。

表16 塾に行っている日数

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1日(週に)	20.3	10.6	14.0	16.0	14.4	8.8
2日	34.0	42.2	42.1	36.6	26.7	29.2
3日	31.2	30.8	25.3	25.2	37.1	34.6
4日	8.0	12.5	7.3	11.7	10.9	10.5
5日	2.9	2.9	9.3	7.4	5.9	10.5
6日	2.2	0.0	2.0	2.5	2.0	4.1
7日	1.4	1.0	0.0	0.6	3.0	2.3
平均日数(日/週)	2.51	2.59	2.62	2.67	2.85	3.06
	2.55		2.65		2.95	

表17 塾に行っている時間

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1日30分くらい	4.3	1.9	0.7	2.5	1.5	0.6
30分～1時間	14.5	21.4	11.0	13.8	7.0	4.7
1時間～1時間半	34.9	30.0	28.7	23.0	39.7	34.3
1時間半～2時間	20.3	17.5	24.0	19.4	20.4	18.9
2時間～2時間半	10.1	12.6	9.6	15.6	9.0	10.7
2時間半～3時間	10.1	11.7	9.6	9.4	7.0	10.7
3時間以上	5.8	4.9	16.4	16.3	15.4	20.1

図16 塾に行っている理由

(%)

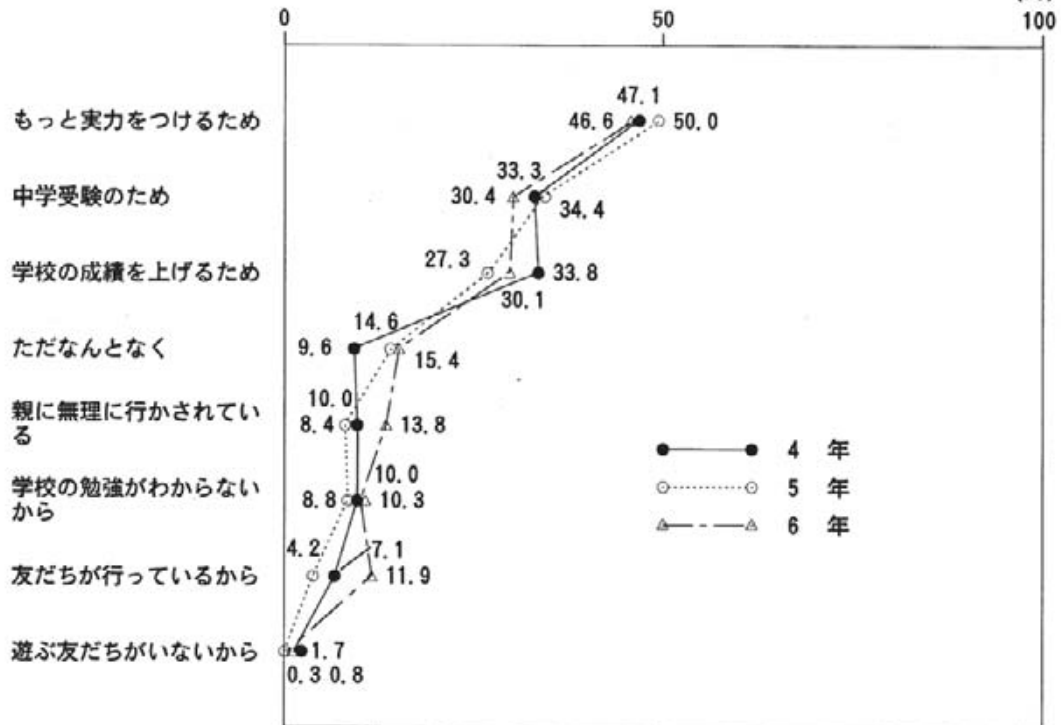


表18には男女別の結果を示している。この表から、先の「学年が上がるにつれて塾の時間が多くなる」ことについての原因を探るとすると、「友だちが行っているから」という子どもの割合が6年生で大きく増えており、「ただなんとなく」と答えた子ども5年生から

急上昇している。また、「親に無理に行かされている」と感じている子ども6年生になると上昇している。いずれも消極的な理由であるが、子ども社会の情勢から判断して、子どもたちがそれに流されているといった感がある。塾に通う理由がこのようにネガティブに

表18 塾に行っている理由

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
もっと実力をつけるため	46.3	48.1	46.6	53.1	44.8	48.8
中学受験のため	30.9	36.5	31.1	37.5	29.9	31.0
学校の成績を上げるため	27.9	41.3	26.4	28.1	30.8	29.2
親に無理に行かされている	14.0	4.8	12.2	5.0	16.4	10.7
学校の勉強がわからないから	12.5	6.7	10.1	7.5	9.0	11.9
ただなんとなく	9.6	9.6	17.6	11.9	16.4	14.3
友だちが行っているから	5.9	8.7	6.8	1.9	12.4	11.3
遊ぶ友だちがいないから	1.5	1.9	0.7	0.0	1.5	0.0

なっていくにつれて塾通いの楽しさは減少していく（図17、表19）。4年生の頃は塾に行くのが「とても楽しい」と答えている子が39%（「わりと楽しい」まで含めると65%）もいたのに、塾に行く理由が消極的・受動的に

なっていくにしたがって、5年生で29%（同62%）、6年生では23%（同58%）と減少の一途をたどっていくようになる。

習いごとについては、図18、表20、表21のとおりである。

図17 塾は楽しいか

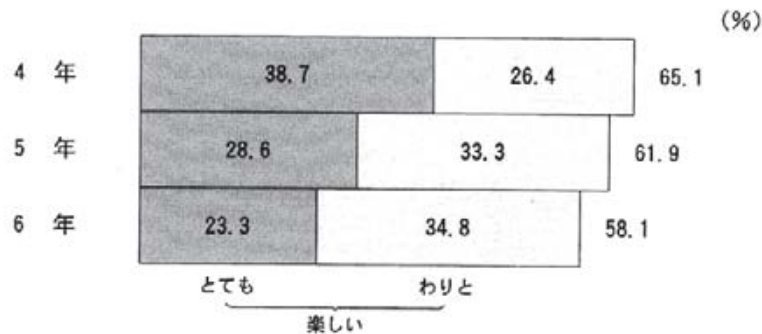


表19 塾は楽しいか

(%)

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
とても楽しい	37.0	40.9	24.4	32.7	22.2	24.6
わりと楽しい	24.8	28.3	32.7	33.9	34.8	35.2
どちらかといえば楽しい	22.1	20.0	25.0	20.5	18.6	20.1
どちらかといえば楽しくない	6.7	5.8	6.0	7.0	11.3	7.8
あまり楽しくない	6.7	2.5	3.0	1.8	7.2	8.4
ぜんぜん楽しくない	2.7	2.5	8.9	4.1	5.9	3.9

図18 習いごとをしているか

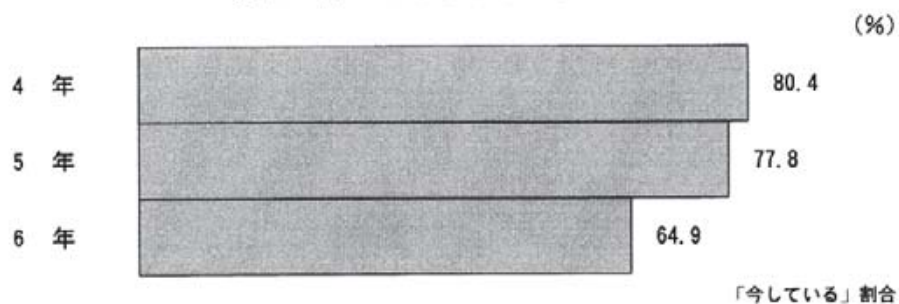


表20 習いごとをしているか

(%)

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
今している	76.8	84.5	72.6	82.6	57.6	73.0
前はしていたが今はしていない	8.6	7.4	9.7	7.5	17.1	15.3
していない	14.6	8.1	17.7	9.9	25.3	11.7

表21 習いごとに行っている日数

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1日(週に)	27.7	38.7	27.5	28.0	30.9	32.9
2日	25.7	17.3	21.9	23.0	23.2	22.7
3日	17.0	14.2	15.5	16.8	24.7	11.6
4日	14.8	15.6	15.5	13.9	9.3	14.8
5日	5.7	8.4	12.8	9.1	6.7	6.9
6日	6.1	3.6	4.1	6.6	3.1	10.2
7日	3.0	2.2	2.7	2.6	2.1	0.9



この章では、子どもたちが友だち・先生・両親と、どのようなかかわりを持っているか追ってみたい。

●仲よしの友だちと)))

表22は仲よしの友だちの数をたずねたものである。どの学年も「10人以上」と答えた子が最も多かった。さらに、学年・男女別にみていくと、4・5年生の男子の7割は「10人以上」の仲よしがいると答えている。この時期、社会性が大きく伸びるといわれているが、元気な男子は遊びを通して、集団の広がり

みせているようだ。

一方、5年生女子で「10人以上」と答えている子は52%、6年生女子では41%と減ってきている。そして、「5人」と比較的行動しやすい、まとまりのある人数を答えている子が13%であった。

表22 仲よしの友だち

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
いない	0.6	0.0	0.0	0.3	0.5	0.3
1人	0.6	1.4	0.3	1.4	0.8	2.1
2人	0.9	5.1	1.7	2.5	2.1	6.4
3人	3.3	5.7	2.9	5.9	5.6	8.9
4人	5.9	6.1	4.1	4.7	4.0	6.7
5人	5.9	6.8	6.4	12.3	6.9	12.6
6人	5.0	6.1	2.6	8.1	8.2	8.6
7人	3.6	1.4	3.8	5.3	5.3	7.1
8人	3.8	5.7	3.2	3.6	2.4	5.2
9人	3.0	4.4	6.4	4.2	2.7	0.9
10人以上	67.4	57.3	68.6	51.7	61.5	41.2

○ は最大値
 ○ は2番目に大きい値

図19は「自分のことを何でも話せる親友」の数をたずねたものである。女子は、4・5・6年生とも「1人だけ」と答えた子が3割もいた。男子は「いない」または「4人以上」と答えている子が多く、ここでも遊び仲間としての意識が強いことがわかる。

では、そのような友だちと、どんな話をしているのだろうか。図20は友だちとの会話の内容をたずねたものである。どの学年も「遊びの約束」についての話が上位にきているが、「好きな子のこと」については、6年生女子

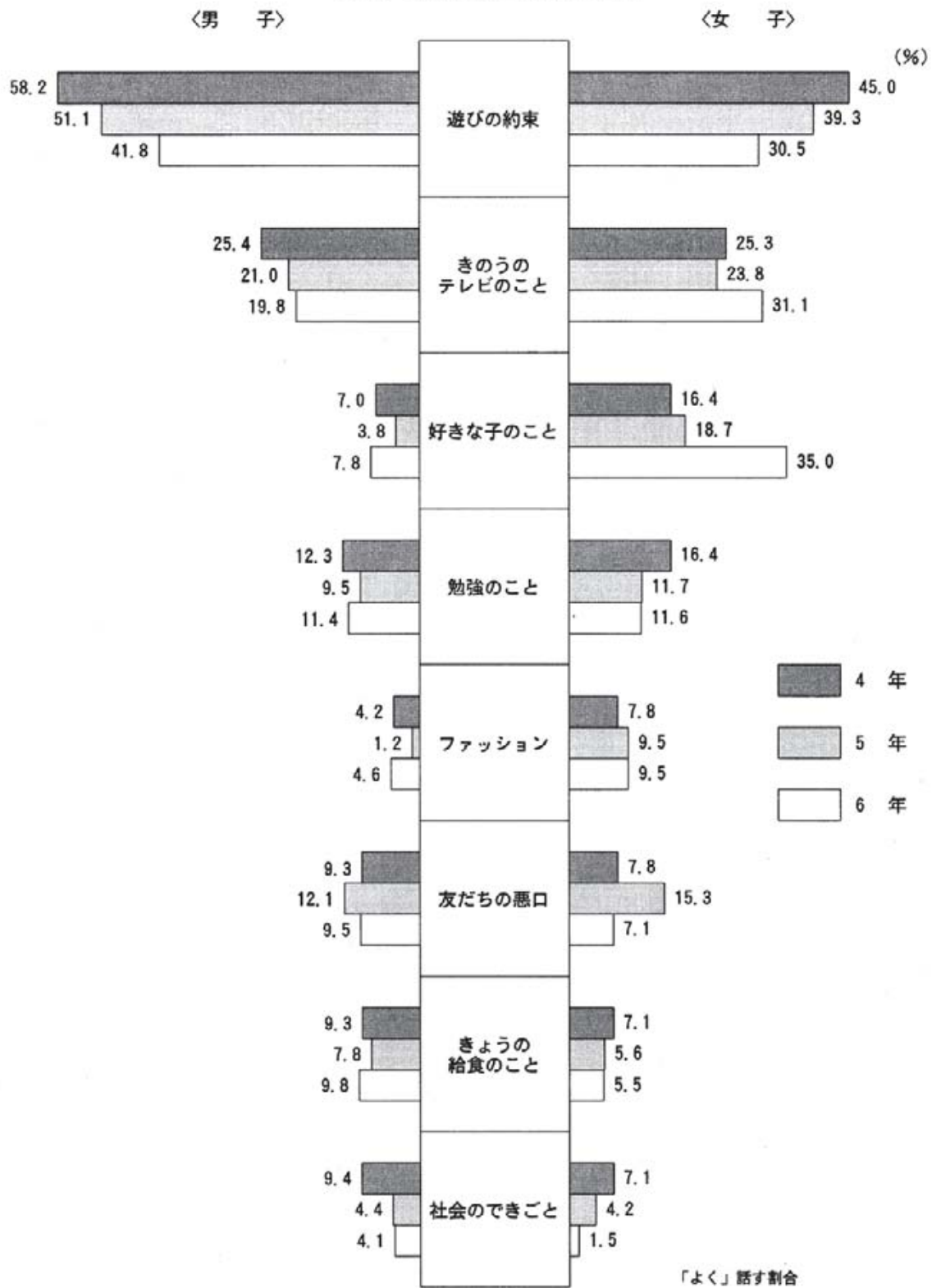
が35%と非常に高い数値を示している。また「好きな子のこと」「きのうのテレビのこと」「ファッションのこと」は、いずれの学年も男子よりも女子の話題にされているようだ。

以上の様子から元気いっぱい大勢の友だちと遊ぶ4年生男子から学年進行にともない気の合った子同士のグループになっていく6年生男子の姿や、少数でグループを作り、より親密度を増していく6年生女子の姿が見えてくるようである。

図19 親友の数

		(%)				
4年	男子	22.3	18.7	22.3	12.8	23.9
	女子	9.6	29.7	24.0	19.9	16.8
5年	男子	25.9	22.1	18.9	12.7	20.4
	女子	7.9	29.2	28.7	15.7	18.5
6年	男子	23.0	20.7	19.3	14.7	22.3
	女子	8.3	33.3	27.8	17.0	13.6
		いない	1人だけ いる	2人	3人	4人以上

図20 友だちとの会話の内容



●担任の先生と)))

表23は担任の先生とのふれあいの様子をたずねたものである。

先生の机のまわりに行っておしゃべりをしたり、遠足のとき、先生におやつをあげたりと、ふれあいを求めて積極的に先生のところに行くのは男子よりも女子に多く、学年で見ると4年生に多いということがわかる。また多くの教師は、子どもたちが困ったことや悩みを話してほしいと思っていることだろう。しかし、困ったことや悩みを先生に相談するのは、4年生の3割で、学年が進行するにつれ、その数は減り、6年生男子では1割程度

になってしまう。それとは逆に、かげで先生の悪口を言ったり、先生に口答えをしたりする割合が他の学年よりも高くなっている。

図21は先生とのふれあいを学年別に表したものである。グラフの形状が4年生と5・6年生で違っている。これは、身体的にも、精神的にも大きく変化し、おとなや教師を冷静に見つめ、批判的になったり、干渉されることを拒否したりする思春期の特性の1つが表れているといえるだろう。表24からも同様のことがわかり、担任の先生への信頼度も学年によって大きく変わってきている。

表23 先生とのふれあい

(%)

	4 年		5 年		6 年	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
先生のまわりに行っておしゃべりをする	23.0	39.1	26.6	35.8	19.0	31.4
遠足のとき、おやつをあげる	27.9	36.1	10.3	25.4	15.9	22.8
困ったことや悩みを相談する	27.5	26.2	14.1	12.0	10.3	15.0
先生に口答えする	13.8	5.8	14.7	13.5	22.0	12.5
かげで先生の悪口を言う	8.4	5.5	16.2	10.1	17.8	14.4

「とてもよく」+「わりと」する割合
 ○は最大値
 □は最小値

図21 先生とのふれあい

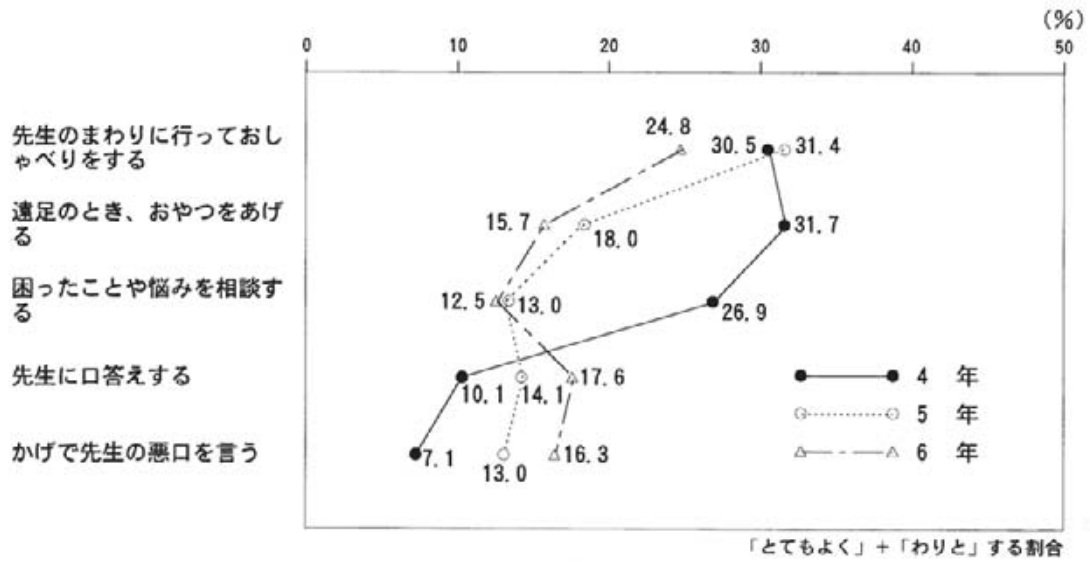


表24 先生への信頼

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
先生は、いろいろなことをよく知っている	51.5	54.1	32.9	33.6	26.9	36.2
先生は、クラスの子どもたちを好きだ	41.1	55.8	25.9	34.1	27.2	39.1

「とてもそう思う」割合
 ○ は最大値
 — は最小値

●両親と)))

表25は、両親と毎日のできごとや学校のことをどの程度話しているかをたずねたものである。両親とも男子よりも女子の方がよく話しているが、6年生の女子は父親に対しては男子よりやや低い。「毎日とてもよく・わりと話す」数値に注目すると、1年ごとに学年が上がるにつれ子どもたちは、親に口を閉ざしがちになっている様子がわかる。

同様に表26は、両親は仲よしの友だちの名前をどのくらい知っているかをとずねたものである。「たぶん全員・だいたい知っている」の数値をみると、女子は学年が上が

るにつれ父親との距離を感じさせる傾向が顕著である。

表27は、両親を尊敬しているかをたずねたものである。父親・母親に顕著な差はみられない。学年別にみると、4年生の女子の8割が両親を尊敬しているのに比べ、学年が上がるにつれ、やはり尊敬の割合が低くなってきている。また6年生については、男子は父親の方を母親より尊敬しており、女子は母親の方を父親より尊敬していると言っている。男子から男性へ、女子から女性へと変化するこの時期、両親への見方も変わってきているこ

表25 毎日のできごとや学校のことを話すか

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
お父さん	51.8	43.2	36.9	50.8	53.3	40.1	46.2	37.4	36.4
お母さん	78.9	70.5	68.5	75.7	82.6	61.0	79.4	64.4	73.2

「毎日とてもよく」+「わりと」話す割合

表26 仲よしの友だちの名前を知っているか

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
お父さん	25.7	18.7	18.4	27.6	23.5	18.1	19.2	20.0	16.5
お母さん	65.1	59.7	62.6	56.7	74.7	51.7	67.2	58.1	67.7

「たぶん全員」+「だいたい」知っている割合

とがうかがえるようである。

表28、図22は、両親にしてもらっていることをたずねたものである。誕生日や祝いごとを8割の子どもたちが祝ってもらっているが、友だちのことについて話したり、勉強や宿題をみてもらったりする子は5割、一緒に遊ぶ子は、6年生になると2割で、4年生の半分になっている。さすがに手足のつめを切ってもらっている子は6年生では、ほんのわずかに

すぎない。

4年生から5年生・6年生と身体的にも精神的にも大きく変化し、子どもからおとなへの移行期であるといわれているが、今までのデータからも、それぞれの発達の特徴が表れていた。豊かな人間関係を育むためには、これらの特性を十分理解したうえで、子どもたちに接していくことが大切なことを痛感した。

表27 尊敬しているか

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
お父さん	74.0	61.6	60.5	69.6	79.0	59.9	63.2	63.0	57.7
お母さん	77.5	66.2	60.8	72.5	83.2	63.1	69.1	55.2	67.1

「とても」+「わりと」尊敬している割合

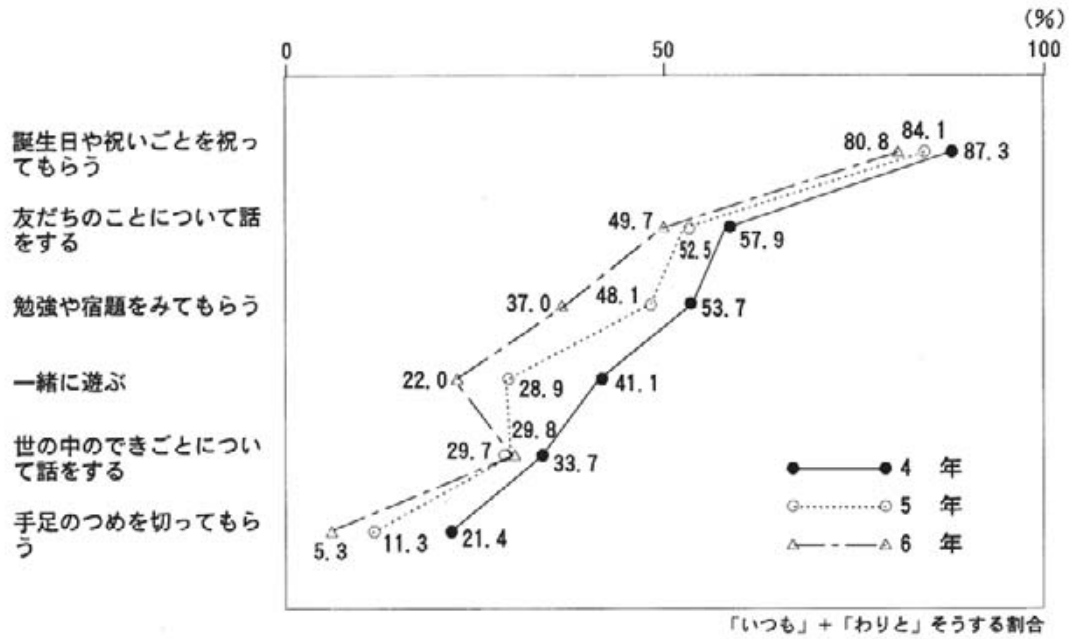
表28 両親にしてもらっていること

(%)

	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
誕生日や祝いごとを祝ってもらう	82.2	89.8	79.6	87.7	78.3	83.5
友だちのことについて話をする	50.9	66.2	41.1	63.4	42.3	58.2
勉強や宿題をみてもらう	50.4	57.6	41.1	55.0	31.2	43.6
一緒に遊ぶ	39.8	42.7	23.1	34.4	21.3	22.7
世の中のできごとについて話をする	35.3	31.7	29.1	30.2	33.1	26.2
手足のつめを切ってもらう	24.1	18.3	13.8	9.0	7.0	3.3

「いつも」+「わりと」そうする割合
○は最大値
—は最小値

図22 両親にしてもらっていること





この章では、子どもたちの心理的な成長を男女の比較をからめて述べていくことにしたい。

●ゆらぐ未来指向)))

まず表29は、もう一度生まれ変わるとしたら、男女のどちらがいいかをたずねたものである。

「ぜったい・できれば男」の割合は、4年生63%、5年生64%、6年生70%と、徐々に上がっていく。これに対し、「ぜったい・できれば女」の割合は、4年生37%、5年生36%、6年生30%と少しずつ減少していく。

さらに男女別で比較してみると、男子は4年生94%、5年生97%、6年生95%という高い割合で、男子に生まれたいとしている。加えて女子も、4年生29%、5年生32%、6年生41%と、男子に生まれ変わりたい割合が学年とともに上がっていく。

これに対して、また女に生まれたいとして

いる女子は、4年生71%、5年生68%、6年生59%と、学年が上がるにしたがい割合が減少しており、特に「ぜったい女がいい」と思っている女子は、4年生で41%、5年生で35%、6年生では実に26%となり、女子の男性指向が一層強まる傾向が読みとれる。

男女平等、男女同権といわれる現在であるが、いまだに世の中の体制が男性有利に動いている社会背景を、子どもたちも敏感に感じとっているというデータともいえよう。

次に表30は、おとなになりたいかどうかをたずねた結果である。本来、子どもは、未来を指向する生きものであるといわれるが、今回の調査では、「早くおとなになりたい」と思っている子は、どの学年の子も約3割前後

であった。「今のままがいい」と思う子は、4年生42%、5年生47%、6年生49%と、やや増加する傾向にある。6年生の約半数が現状維持の意志を示しているのが、気にかかる結果である。

男女別の比較では、「もっと昔に戻りたい」と希望する女子の割合が高いことが注目される。おじいさんやおばあさんではないのだから、悲観的にならず、もっと自らすすんで未来を力強く指向してほしい気がする。

表29 もう一度生まれ変わるとしたら

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
ぜったい男	47.9	44.5	46.8	81.6	10.7	79.7	10.6	72.5	17.1
できれば男	15.0	19.2	23.2	12.1	18.1	17.2	21.2	22.7	23.9
できれば女	16.1	17.8	16.5	3.6	29.9	1.5	33.5	2.4	32.7
ぜったい女	21.0	18.5	13.5	2.7	41.3	1.6	34.7	2.4	26.3

表30 早くおとなになりたいか

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
早くおとなになりたい	30.9	26.3	30.0	33.2	28.3	28.3	24.4	31.1	28.7
今のままがいい	41.9	46.8	48.7	45.3	> 38.0	52.9	>> 40.9	50.1	47.1
もっと昔に戻りたい	27.2	26.9	21.3	21.5	<< 33.7	18.8	<<< 34.7	18.8	< 24.2

不等号は5%を単位に1つつけて表示

●うすれる幸福感))

表31は、現在の幸福感を示したものである。表によると、「とても・わりと幸せ」の割合が、4年生73%、5年生62%、6年生61%と学年が上がるにしたがい減少していくことがわかる。

男女別で比較してみると、「幸せ」である割合は、どの学年も女子がかなり高くなっており、逆に男子は、「あまり・ぜんぜん幸せでない」割合が女子に比べて高くなっている。

次に表32は、自分が好きかどうかをたずねた結果である。現在の自分が「とても・わりと好き」と答えた子は、4年生64%、5年生

46%、6年生45%と、学年が上がるにつれて減少していく傾向が顕著である。逆に、自分が「好きでない」割合は4年生14%、5年生26%、6年生29%と、学年が上がるにつれて増えていくことがわかる。

男女別の比較では、どの学年も、男子が自分に対して肯定的で、女子は悲観的という傾向が強い。特に、4年生から5年生にかけての差が顕著である。高学年の担任を受け持つむずかしさが、こうした子どもたちの自己像の変化に影響されていることがうかがえる。

表31 現在、幸福か

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
とても+わりと 幸せ	73.2	62.0	60.9	67.3 <<	79.9	59.5	64.4	55.8 <<	66.7
どちらかといえば 幸せ	18.4	23.7	25.6	21.9 >	14.4	24.6	22.8	28.5 >	22.3
あまり+ぜんぜん 幸せでない	8.4	14.3	13.5	10.8 >	5.7	15.9	12.8	15.7	11.0

不等号は5%を単位に1つつけて表示

表32 自分が好きか

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
とても+わりと 好き	64.0	46.0	44.5	64.2	63.8	48.3	43.9	49.6 >>	38.6
どちらかといえば 好き	22.2	28.4	26.7	22.6	21.8	29.5	27.2	23.3 <	30.7
あまり+ぜんぜん 好きでない	13.8	25.6	28.8	13.2	14.4	22.2 <	28.9	27.1	30.7

不等号は5%を単位に1つつけて表示

●不健康な体調))

表33は、体の不調やストレスなどをたずねた結果である。学年差をみると、「もっといっぱい遊びたい」「おなかがすいて、困る」「勉強ができなくて、親に悪い」の3項目は4年生がいちばん割合が高く、比較的健全な成長のニュアンスが感じとれるが、学年が上がるにしたがい、空腹感や遊び意欲がうすれていくらしい。

6年生ともなると、「朝、学校へ行きたくない」30%、「体が疲れやすい」24%、「睡眠不足」54%、「親によく口答えする」41%、「ストレスがたまる」40%と、すべてのネガ

ティブな項目で最大値を示してしまうことになる。つまり、小学6年生の3～4割の子が不健康な状態のまま、生活しているといっても過言ではなかろう。

男女別で比較してみると、「朝、学校へ行きたくない」のは、高学年の男子が割合が高く、同様に「もっといっぱい遊びたい」「おなかがすいて、困る」の2項目は、特に男子に顕著であることがわかる。「ストレスがたまる」は、やや男子の割合が高いが、「親によく口答えする」のは女子に多く、特に6年生の女子は44%と高い数値を示している。

表33 体の不調

(%)

	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
① 朝、学校へ行きたくない	27.1	23.8	29.5	26.2	28.1	27.2	20.5	33.5	24.8
② 体が疲れやすい	22.1	21.4	24.2	20.1	24.5	21.1	21.8	22.9	25.5
③ 睡眠不足で、もっとねむりたい	42.4	48.6	53.8	42.8	42.1	48.3	49.1	53.2	54.6
④ もっといっぱい遊びたい	67.6	61.1	62.5	73.1	51.3	68.2	54.4	75.0	48.0
⑤ おなかがすいて、困る	26.1	23.0	25.5	33.3	18.0	29.9	16.3	33.3	16.4
⑥ 勉強ができなくて、親に悪い	20.2	16.4	19.2	20.3	20.1	17.4	15.4	20.9	17.2
⑦ 親によく口答えする	27.4	32.5	41.2	25.8	29.2	30.6	34.2	38.4	44.3
⑧ ストレスがたまる	33.9	37.2	39.5	34.9	32.8	40.8	33.8	39.8	39.1

「いつも」+「ときどき」そう思う割合
○は最大値
不等号は5%を単位に1つつけて表示

●失われゆく自信))

最後に表34をごらんください。これは、10項目についての自信をたずねたものである。

表によれば、①～⑩のどの項目においても4年生が最大値を示しており、子どもらしさの証明でもある。つまり、万能感や自己肯定感をもって生活していることがわかる。

特に「最後までがんばりぬく力」や、「体の丈夫さ」「誰とでも仲よく、親切にする力」は、5割以上の4年生が自信があると答

えている。

これに対して、5年、6年と学年が上がる、どの項目も自信を示す数値が低くなり、「最後までがんばりぬく力」などは、6年生で31%まで減少していく。他に、「成績のよさ」は4年生26%が6年生17%、「約束を守る力」は4年生47%が6年生34%、「芸術的な才能」は4年生37%が6年生20%というように、かなりの減少傾向を示している。

表34 自信のあること

	(%)								
	4年	5年	6年	4年		5年		6年	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
① 学校の成績のよさ	26.1	17.7	17.4	30.8	20.7	23.5	12.1	22.5	11.6
② 運動神経のよさ	43.6	31.6	30.8	52.8	32.9	39.7	23.5	40.1	20.1
③ 体の丈夫さ	55.3	46.8	45.0	58.3	51.9	49.6	44.2	51.8	37.3
④ 人前でも堂々と発表する力	28.5	23.6	22.0	31.3	25.3	28.3	19.1	27.5	15.8
⑤ 最後までがんばりぬく力	50.3	35.6	30.9	54.9	45.0	37.1	34.2	43.3	28.2
⑥ 誰とでも仲よく、親切にする力	53.6	41.0	41.1	51.5	55.9	40.6	41.5	45.0	36.6
⑦ 約束を最後まで守りぬく力	47.1	34.9	33.7	43.7	51.0	32.5	37.2	31.1	36.8
⑧ 身のまわりの整理整頓する力	44.7	38.4	36.8	36.3	54.2	29.5	47.2	29.9	44.6
⑨ ファッションセンスのよさやおしゃれの感覚	17.7	12.7	16.4	12.0	24.3	7.5	17.8	12.8	20.4
⑩ 芸術的な才能	36.5	25.7	19.8	28.6	44.5	22.8	28.4	17.0	22.9

「とても」+「わりと」自信がある割合
○は最大値
不等号は5%を単位に1つつけて表示

確かに高学年になれば、自己を客観的に、冷静な目でみることがかなりできるようになるので、こうした結果は致し方ないであろうが、6年生であれば、もう少し高く自分を評価して、自信を持って生きてほしい気がした。

男女別でみると、「約束を守る力」「身のまわりの整理」「ファッション、おしゃれ」「芸術的な才能」は、女子の数値が高く、その他の項目は、おおむね男子の数値が高いことがわかる。